

大学放浪記 (25)

伊藤信孝

マエジョ大学客員教授・再生可能エネルギー学部

本報では、筆者の身の回りで生じた怪現象について述べる。日本の大学を定年退職して1年も経たずにタイの大学に招聘を受け赴任した。と言っても当初はそれほど長く滞在できるとは頭から考えて居なかった。本来招かれたのは、現職時代に立ち上げた学生に対する2つの国際プログラムに対する表彰をしたい、と言うことでその形は大学からの名誉学位授与と言うことであった。だからそれだけのことでその後も滞在できるなどとは思っても居なかった。定年退職後、日本の大学からもほぼ自動的に同様の称号を頂いたがある年数以上その大学に在籍すればこの称号はほぼ自動的に頂けるかに見え、年数の勘定は教授で何年、助教授で何年（ただし、助教授での滞在年数は2分の1で勘定する）という在籍年数の総和がある年数を満たしておれば、ほぼ間違いなく頂けるという風に聞き及んでいる。とにかく海外の大学からこのような名誉を頂けるなどとは想像もしていなかった。やはり名誉学位ともなると推薦者数も多く、学内での選考に手間取り、一足飛びに認定という運びにはならないらしい。筆者の場合も表彰までに2年ほど掛かったかに聞いている。そしてタイに渡り半年間は無給で宿舍のみが無料という形でのスタートであった。以前にもタイの大学での雇用に関しては事務手続きが遅く、かと言って雇用における身分、給与など準備する必要があり、無給となるのかと言えば沿うではない。一種の見習い期間という形に相当する。偉いひとでも本当にそれだけの評価に相当した実力、能力を維持して居るかを見極める期間と解すれば、差ほど間違っではない。その無給での半年間の滞在の間に客員教授として滞在しないかという話が出てきたが、このことは相手大学、特に雇用を考える学部長の一存が採否を分ける。筆者の場合は、幸運であったかと思われる。当初は一人の教員で関係学術分野の教育、学術活動の集いに参加するだけであったが、その後、週1回、学部長アドバイザーとしての役割、待遇も加わった。週1回が週2回、3回と増え、後に学部長室の隣に位置するエグゼクティブ・ルーム（学部長補佐全員が席を並べる共同部屋）に机と椅子を構えることになった。その後、学部長の任期満了で職を失うかに思われたが、次期学部長の計らいで首がつながり、結果として長期の滞在となった訳である。その学部長も2期満了となり、その大学を離れることになったが、後半は大学レベルのリサーチ・アドミニストレーション・センター（研究業務部）のアドバイザーと言う身分も頂いた。約5年ほどの在籍であった。ここで強調しておきたいことは、被雇用者が単なる講義担当の1教員の身分なのか、それとも学部レベルにとどまらず大学レベルの職務にも関わっているか、によって学術活動を行う上での環境が全く異なる。筆者の場合、幸にも良き学部長に恵まれたこともあって、多くの大学レベルのプロジェクトやプログラムへの参加の機会を得ることが出来た。招聘して頂いた学部長（必ずしも学部長に限らないが）によって在籍時の環境は大きく異なる。

筆者の場合、招いて頂いた学部長が本当に管理者として何をやりたいかを熟知し、極めて積極的に革新的な提案をし、それにとまなう予算の手配、準備など本当にやる気であり、それが自分のためではなく、大学、学生、教育のためという極めて純粋な所に原点があった。学部長だからといって「お高く」とまっている姿勢は全く無い。むしろ学部長の側からどんどん仕事がきて、意志決定の前に相談、確認のため学部長が出向いてくると言う、極めて純粋な志の持ち主であった。管理運営に携わる「長」たる者は見習うべき点の重要な点である。タイの大学では教員の最高職階はあたかも助教授であるかの如き誤解が社会的にも大学内でも常識化しているということは既述したが、本当に、「必ずしも最高位の教授でなくても管理運営能力に秀でていれば、職階は問わない、学部長にでも学長にもなれる」という解釈が可能な要人(学長、学部長、センター長などの要職に就く人材)は稀である。それだけに、こうした人には頑張ってもらいたいと切望するがこれを阻止しようとするのが数による政治的な動きである。昇格、昇任にはライバル候補者との差別化がなければならない。ほぼ同じと言う事であれば、卒業生だから等という別の要素が入る可能性が多く、現実には後者の方が一般化して居るから、筆者に取っては失望、時には全く絶望の気持ちすら持ち合わせている。「何とかならないものか?」と思案して、プロポーザルやサジェスチョンをして改善が成されなければ、より一層失望感は増す。そして失意が蓄積して意見を言わなくなる。組織の構成員の間でコミュニケーションがなくなり、反対に疑心暗鬼が拡がる。「何をやるのか、何をやりたいのか、何の為、誰の為に」と言った意思確認はなく、ただ学長や学部長になりたいというのが目的では大学の進展は一向に見られず、そうした環境の下で教育を受けた学生もモチベーションは極めて低く、その結果が大学のランキングにも反映する。要人がそれに気付いているかどうかは定かでないが、示唆やプロポーザルを出しても反応も無ければ改善もない。ひょっとすると提出したそれらに要人は目を通していいのか?と言う懐疑心さえも出てくる。無反応は無関心につながる。興味も関心もないのに要職というポストに執着する。世の中から置いて行かれ、益々急降下で凋落の軌跡を辿る。

さて上記は本報の前文、または序文であり、本当に言いたいこと、身の回りで起きた怪現象についてここから紹介する。外国人教員がタイの大学で働く場合、特に講義を持つ場合は必ず現地の教員とのシェア(分担)が義務づけられている。実質がどうであろうと、公的な書類では共同分担でなければならない。講義負担(または分担)に関してはパートナーとなる教員と前もって内容や分担の範囲などについて打ち合わせをし、合意の上でシラバスにその内容を載せ、学生の履修申告を待って開講、授業がスタートする。当初聞いていた講義が始まる時期が来て、パートナーとなる教員を事務職員を通じて紹介してもらい、面会して打ち合わせを申し入れたが、追って連絡するというので待っていても一向に返事がない。結局会う機会も無ければ、打ち合わせの機会も無く、時は経過した。新しい講義だからと言う理由で講義の内容も定まっていないう言い訳だけが帰ってきた。こちらからはそれなりの内容を15週間分作成し「このような内容ではどうか?」と送付したが無反応であった。新学期が始まり講義も始まっているにも拘わらず筆者には何の情報も届かない。知人の話

では、あらたに3名ほどの教員がその講義のため招集され、筆者のオフィスの隣の大部屋に入ると聞いていた。机と椅子が用意されているようだが、机の上には何もなく誰一人として来ている様子はない。しかし状況から判断して講義が始まっているのは間違いないと推察される。そこで知人に尋ねたら「貴方の名前はカリキュラムの何処にも見あたらない」と言う。メールアドレスとパスワードを入力すると自分が負担する講義の名前、履修申告学生の氏名と人数、各週の講義実姉曜日、時間などが詳細に記載された情報が入手できるという。そうした事を知らず、ひたすら主任の地位にある人物からの情報を待ち続けていた筆者にとっては驚嘆の話である。ということは、すでに筆者は当初の講義担当者から外れていることを示す結果である。知人の中には俺の講義を手伝ってくれと言う話もあったが、講義負担は公式な手続きに基づいてなされ、また公的に承認されなければ正式な行為としては認証されない。さすればティーチング・ロードを回避したと言う事で契約違反に問われる可能性も無きにしもあらずと言う事になり、解願にとどまらず罰金を払えとなるやも知れない。重要な事なので、副学長に会い事実を話し、対応を依頼した。1週間から10日ほどして返答があった。講義名は当初の計画のものとは全く異なる内容で学部生向けに3時間、修士課程学生にその4倍ほどの講義をするよう予定が組まれていた。ティーチング・ロードがゼロでは上記の様な低評価のみならず、契約違反となるのでは、何が何でも負担し、相当の役割を果たしたという実績を作らねばならない。筆者が自ら負担を逃がれるために行動を起こした訳ではなくても、それは理由にはならないと判断し準備している。そうこうするうちに訳の分からぬメールが入ってきた。文面がなくURLだけが書かれたメールで、調べた限りでは差出人は筆者自分になっている。スマホや(iPad)にも同じメールが受信されるが、時にはスマホでは文字が小さく見つらいのでラップトップで見たり、またメールアドレスが異なる場所に受信されたメールを読みやすくするためにスマホから別の機器に転送する場合も日常やっているもので、ひょっとするとこの行為がもとで自分から自分への転送となったのではと考え、必死で探したが見つからない。このような状態であるから当初は気付かず、気にもせず、また気付かなかったが、ふとしたことからそのメールを開けることになった。開けてみると中身は論文で有り、農家調査の手順などをまとめた内容であった。よくよく見ると著者は当初筆者が聞いていた新しい講義担当に関係すると思われる7人ほどの教員が連盟で名前を連ねている。詳細に見て見ると、筆者自身も共著者の一人に入ってるから驚きである。しかも第2著者である。他の共著者のバック・グラウンドを見て見るとコンピュータや情報関係分野の教員が多く、副学長や主任(Head)も含まれていた。筆者に取っては論文が送付されてきた意味が全く理解できなかった。知らぬところで共著者になっていて、しかもその論文が誰から送付されたのかも分からず、対応に苦慮していたが、放置して置いても意味はないので、第1著者に、「誰が私にこの論文を送付して頂いたのか、わからないので第1著者である貴方宛にこのメールを送付しお聞きする」と言って他の共著者にもCCで配信した。すると第5番目か、6番目の共著者からリジェクトのメールが届いた。これも意味不明の反応である。その後第1著者から返事が来て、「貴方の名前を無断で利用

して申し訳ない。お詫びする」という簡単な詫び状メールがきた。この第1著者には面識はあるが当初1~2度ほど会っただけでその後会っていないので顔すら覚えていない。ITの専門家と記憶するが、赴任当初メールの設定で立ち会いを依頼したが、結局その依頼を拒否するかの如く、長い間距離を置いて居るかの様な関係である。どうして筆者宛てのメールの差し出し人が自分なのか、また新しい講義担当（分担）に関わる一人でもあるので、その行動には疑問点が多い。また教員が自分に関する講義負担にメールアドレスとパスワードでアクセスできるというのに、筆者の場合ほうまくいかず、知人も不思議に思い、試みてくれたが徒労に終わり、おかしい」という結果に終わった事もある。メールもアドレスとパスワードだけでは機能せず、それをアクティベートする必要がある。その設定の依頼を赴任時に依頼したが、反応はなく結果として依頼は拒否された形で現在に至っている。おそらく「協力したくない」と言うのが本音であり、講義負担も一緒にやりたくないと言う意志表示に見える。タイの別の大学の知人にこの事を話すと「その人は自分に自信が無いのではないか、だからかたくなに貴方に会うことを嫌っているのではないか」という指摘である。一緒にやりたくないと言うのに論文には共著者として入れているのは何故か」と聞いてみると、共著者に教授が入っていると論文の閲読がスムーズに行くので、そこを利用したのではないか、という答えであった。「なるほど、そう言われればつじつまが合う」と納得した次第である。何故一緒にやることを毛嫌いするか、と言うと「一緒にやれば自分の実力が相手に分かり、また学生にも比較される」ことを恐れているのではないかと言うことである。しかしこの状況を続けていると、何時まで経っても大学の質的レベルは上がらない。教員自身は困らないが大学と学生においては悲劇である。本来教員たる者自ら積極的に学ぶ姿勢がなければ進歩など見込めない。いつまでもこの姿勢を継続する事は、教員自身が昇格、昇級、昇進をしたいと思わない限り可能である。このような人間に限って今回の論文のように、他人の名前を無断で使って、その機会をスマート（この場合は賢いと言う意味ではなく賢いと言う意味である）にクリアしようとしているのではないか。恐ろしい話である。自らは努力せず他人を利用して這い上がるという下劣な姿勢である。またそれ以上に多くの大学教員がこのような姿勢では、教員本人はなんら問題は無いが大学としては困ったことになるのは目に見えている。具体的には大学のランキング低下につながるし、優秀な学生がその大学に集まらなくなる。日本の諺で言うならば「井の中の蛙、大海を知らず」と言う大学に落ちぶれる。だからといってこの種の教員達の意識を如何に変えるか？というところに問題が残る。大学をよくすると言う気持ちもなく、自らやっていることに自身も無く、恥ずかしい思いを為たくないと言う、極めて身勝手な人間の意識を如何に改革するかと言う低レベルな話を為なければ成らなくなる。何が何でもここまで落ちたかと言う思いである。罪を憎んでその人を憎まずと言う諺もあるが、ここまで来ると開いた口が塞がらない。彼ら教員に恥をかかさずに如何に大学のレベル・アップを図るか、つまらぬ次元での悩みでもある。ひとつの可能性は学生達がそうした教員のレベルを熟知、認識し、教員のレベルを超えた学生を育てる事である。教員自らが自覚し、悟り、意識を変えてくれればそれに優る改善策はない言う話な

のであるが・・・・・・・・。